紹介

室城秀之著『うつほ物語の和歌総合研究』

佐藤信一

本書は室城先生による一連の『うつほ物語』に関する注釈活動の副産物の一つである。副産物と言っても単なるオマケではない。国文学研究資料館での共同研究の三年目、『うつほ物語玉琴』、『『うつほ物語考証』の研究』に続いて、『うつほ物語辞典』を作ろうという話になった。そして和歌の項目を担当されたのが室城先生であったかと記憶している。

最初に全体の構成を確認しておく。「『うつほ物語』和歌総覧」、「『うつほ物語』和歌機能一覧」、「『うつほ物語』和歌各句索引」、「『うつほ物語』詠者別和歌総覧」、「『うつほ物語』和歌技巧索引」から成る。

「『うつほ物語』和歌総覧」は、『うつほ物語』のすべての和歌について、尊敬閣文庫蔵前田家十三行本の本文、『風葉集』所収の本文、引歌・類歌、校訂本文、技巧を、掲げたもの。尊敬閣文庫蔵前田家十三行本の本文は、室城先生らの手になる『うつほ物語』の索引である『うつほ物語の総合研究Ⅰ』所載の本文によるもの。各和歌の末に室城先生の前著である『うつほ物語　全』の頁数並びに行数が示されており、それぞれの和歌に、その歌が詠まれた状況と歌句の説明が施されている。歌番号は全体の通し番号と、その巻での通し番号が附されている。歌番号に関して言っておくと、角川文庫とは、「菊の宴」巻頭の神歌をどう処理するかという相違により、番号が一つずれる。また校注古典叢書は五首の古歌の引用に歌番号がないため、番号がずれる。『宇津保物語本文と索引本文編』と国歌大観は尊敬閣文庫蔵前田家十三行本の重複部分の和歌も含んでいるので、番号がずれてしまう。最も合理的な番号は室城先生のものであろうと思われる。

ここで542［菊の宴111］、543［菊の宴112］、544［菊の宴113］について触れておきたい。

542［菊の宴111］は、あて宮の「風雲の驚く亀の甲の上にいかなる塵か山と積もりし」である。「和歌総覧」の解説で「亀の甲の上の山」は、蓬莱山。参考、『太平御覧』巻三八蓬莱山「玄中記曰、東南之大者有二巨鼇一焉、以レ背負二蓬莱山一。『列子』湯問篇「其中有二五山一焉……而五山之根、無レ所二連著一、常随二潮波一、上下往還、不レ得二暫峙一焉。……帝恐下流二於西極一失中群聖之居上、乃命二禹彊一、使二巨鼇十五挙レ首而戴レ之」。」と注する。この歌は、春宮の贈歌541に対する答歌である。春宮の贈歌541には出典は特に指摘されていない。ところで、ここで注目したいのは、あて宮が導入した神仙への志向が次の春宮の贈歌の出典を導き出す趣と見ることが出来る点である。

次の543［菊の宴112］は、春宮の「亀の尾の山には誰も至りな

む君をまつにぞ老いもしぬべき」には「船の内ならぬ人さへ」と消息文が続く。「和歌総覧」の解説では「「老いもしぬべき」は、『白氏文集』海漫漫「海漫漫風浩浩。眼穿不レ見二蓬莱島一、不レ見二蓬莱一不二敢帰一、童男卯女舟中老」参照。」とする。この「海漫漫」の影響は「船の内ならぬ人さへ」の消息文にまで及ぶものであろう。ところで、白居易の「海漫漫」は、神仙の存在を信じて蓬莱を探しに使いをだした皇帝を諷したもの。神仙への志向を詠じたあて宮の叙述との対応が、見て取れるのではないか。

それに応じたあて宮の544［菊の宴113］「山よりも至りがたきは風いたみ危ふきめのみあればなりけり」は、「亀の尾の山には誰も至りなむ」という春宮の贈歌のことばに「山よりも至りがたき」と切り返したもの。ここで「和歌総覧」は、「「風いたみ」は、『白氏文集』の「海漫漫「海漫漫風浩浩。眼穿不レ見二蓬莱島一、不レ見二蓬莱一不二敢帰一、童男卯女舟中老」参照。」として技巧として「「め」に、「目」と「妻」を掛ける。」と指摘する。直接には「風浩浩」の影響であろうが、「め」というところから「眼穿不レ見二蓬莱島一」との関係も視野に入って来はしないか。論証には慎重でなければならないが、このように様々なヒントに満ちているのもこの『和歌総合研究』の特徴であろう。

「『うつほ物語』和歌機能一覧」は『うつほ物語』に見られる和歌をすべて順番に並べ、詠者名と通達の種類を記したものである。先の「和歌総覧」の歌番号を附して、贈歌は「贈」、答歌は「答」、独詠歌は「独」、唱和歌は「唱」としている。また部分部分に見られる神歌や屏風歌、手本は、それぞれ「神歌」、「屏風」、「手本」としており、古歌の引用は「古歌」としている。また贈答歌の処理が興味深い。贈歌に対して答歌がない場合、答歌を詠むべき人名を「答×（人名）」という形で示しているのだが、圧倒的に多いのはあて宮であった。こうした人間関係が一目で見渡せることも、この和歌機能一覧の長所であろう。

次に「『うつほ物語』和歌技巧索引」は、「和歌総覧」で指摘された表現技巧が、技巧別に、五十音順に並べられている。「枕詞索引」、「序詞索引」、「掛詞索引」、「縁語索引」、「対比索引」とから成る。

そして「『うつほ物語』詠者別和歌総覧」は、『うつほ物語』中のすべての和歌を、詠者別に分けて、詠者の五十音順に配列したもの。また各和歌の最後に「機能一覧」による贈答歌・唱和歌・独詠歌の別が示されていて至便である。

また、「『うつほ物語』和歌各句索引」は、『うつほ物語』中のすべての和歌を、各句に分けて、五十音順に配列したもの。「和歌総覧」の歌番号（通し番号と各巻の通し番号）が附されている。だから、「和歌総覧」に立ち帰れば、すぐに『うつほ物語　全』の頁数・行数がわかる仕組みになっている。

以上、内容を通覧してきたが、何れも室城先生の現在に至るまでの『うつほ物語』の注釈に裏打ちされたものである。そして、この『和歌総合研究』によって物語の和歌に対するアプローチの雛形が示されたことになるのではないだろうか。そして各自が各自の対象とする作品に対する「総合研究」を編み出す

ことを室城先生は望んでいるのであろう。そのようなことを思いながらこの書評を終えることにする。

（私家版、四四七ページ）

白田甚五郎・新間進一・外村南都子・徳江元正校注・訳『神楽歌　催馬楽　梁塵秘抄　閑吟集』

久保田　淳

「新編日本古典文学全集」第四十二巻として上梓された本書の母胎は、昭和五十一年（一九七六）三月に「日本古典文学全集」第二十五巻として刊行された同じ書名の一冊であるが、収められている内容は、『梁塵秘抄』に関しては大いに異なっている。すなわち、元の版は今様の詞章を集めた『梁塵秘抄』のみであるのに対して、今回の新編全集版には後白河法皇の言葉が直接に聞ける『梁塵秘抄口伝集』も収められているのである。そして、これらの校注・訳を担当しておられるのは、新間進一・青山学院大学名誉教授（短期大学時代の本学の教授でいらっしゃった）と外村南都子・本学教授である。元版では『梁塵秘抄』の校注・訳は新間先生お一人であった。

『梁塵秘抄』の今様の面白さは改めて言うまでもないが、『梁塵秘抄口伝集』も王朝末から中世への転換期の芸能、さらに広く文化を知る上にきわめて興味深い資料である。今回の新版にこの『口伝集』の部分が外村教授の新注を付して収められたことは、歌謡の研究者はもとよりのこと、広く芸能や中世文学に関心を抱く人々にとってまことに嬉しいことである。後白河法皇を取り巻く今様の衆の多くは、一方では歌人でもあり、またその一部は政治的な事件にも関わっている。そのような古代末・中世初頭の文化や政治のしくみは、『口伝集』を読むことによって透けて見えてくるのである。

「解説」も元の版以降の研究状況を具体的に描き出していて、親切である。一昨年本学で日本歌謡学会の大会が催された折も折、マスコミに報じられた『梁塵秘抄』断簡の出現とその波紋にも言及されている。

なお、他の作品の担当者をも掲げれば、『神楽歌』『催馬楽』はともに白田甚五郎・國學院大学名誉教授、『閑吟集』は徳江元正・國學院大学教授である。最初に記すべきであったが、巻頭に外村教授の「歌謡に見る思いのさまざま」という一文が掲げられていて、恋の歌謡を中心に、早歌や謡曲にも言及して、王朝・中世の歌謡の世界が平易に説かれていることをも申し添えておく。

（二〇〇〇年十二月刊　A5判　五四二ページ　小学館）